

ラングーン以外の地方でも対象となった地域の人々が種痘を避けるために、vaccinator がやってきた時にこの種痘法の対象から外れた近隣の村々に一時的に移動したというケースがvaccination reports に頻繁に報告されている。

最後に、本書は目まぐるしく変化してゆく植民地港湾都市ラングーンにおける、過密化し、分断され、鬱憤の堆積してゆくビルマ人住民の生活を多面体を斬るように分析し、その社会構造を明らかにしようと試みた優れた著書である。またこの研究は現在に根強く続くミャンマーの人種問題の理解に新たな解釈を与えたのではないだろうか。その点でも大変有益な書と言えるだろう。

(直野 温子・Wellcome Unit for the History of Medicine, University of Oxford)

佐藤奈穂、『カンボジア農村に暮らすメ
マリー——貧困に陥らない社会の仕組み』京
都大学学術出版会、2017、v+249p.

本書は、カンボジア北西に位置するシェムリアップ州の農村調査をもとに、カンボジア語で「メマリー」とよばれる寡婦たちが、なぜ貧困に陥らないのかを論じたものである。著者が2010年に提出した博士論文をもとにしており、東南アジア地域研究研究所「地域研究叢書」シリーズの31冊目でもある。

まず、本書の内容を章立てにそって述べる。

第1章「夫を失くした女性たちは貧困か？」では、まず、寡婦の貧困問題が論じられる。先進国において女性世帯主世帯は貧困であることが多く、それが「途上国」にも当てはめられ、女性世帯主世帯の貧困削減が議論されてきた。しかし東南アジアでは一般に、女性世帯主世帯が男性世帯主世帯より貧困とはいえず、むしろ逆の調査結果が出ている。内戦で多くの男性が死亡し、夫不在の世帯が4分の1にもなるカンボジアでも同様である。そして、東南アジア農村の「貧困に陥らない仕組み」の先行研究として、ギアツが論じた「貧困の共有」やスコットによる「モラル・エコノミー」などが検討される。一方、先行研究においてカン

ボジア農村は、互助機能が弱く、農民は個人主義的だといわれてきた。ではなぜ、そのような農村でメマリーの貧困は顕在化していないのかと著者は問う。そして、メマリーのリスクに対する脆弱性と貧困を分析するうえで、「資産」「所得」「ケア」という3つの分析枠組みをたてる意義を述べる。とくに、これまで生産活動の影の部分とされてきた「ケア」を「社会関係の中で捉え直し、その価値を見出していくことは、人々の生を支える基盤を明らかにする1つの要となる」(p.33)と主張している。

第2章「カンボジアの社会・経済と調査村の概要」では、カンボジア全体の概要に続き、調査村T村の立地、人口、家事労働における女性の役割、婚姻状況、メマリーの概要などが述べられる。調査方法は、T村の全204世帯に質問票を用いて行った悉皆調査、参与観察、有力者への聞き取りがあげられている。T村では(カンボジア全体でも)妻方居住が一般的で、結婚後、妻の両親から土地の一部を分与される。T村が妻の出身村である世帯は全体の8割近くにのぼり、離婚した場合、子どもは母が引き取るなど、母子関係が重要である。また、人口1,111人(2007年の著者の調査による)のT村にメマリーは67人おり、著者は分析対象を「夫が死亡した時点で末子が15歳未満であった」(p.62)55人に絞り、表2.5(pp.63-64)「T村のメマリー概要」にまとめている。また本書では、メマリーが世帯内に1人以上存在する51世帯を「メマリー世帯」としている。

第3章「資産所有と相続による資産の獲得」では、T村の資産所有状況とその獲得経緯が論じられる。屋敷地の分与・相続は、結婚後も村に残る子(主に娘)に対し、結婚を機になされ、とくに親と同居する子にはより多くの土地が与えられる。メマリーは自分の親と同居することが多く、より多くの資産が与えられる傾向にある。調査によれば、親と同居中で相続がまだの世帯も含めると、キョウダイの所有地に居住する1世帯を除き、すべてのメマリー世帯が屋敷地を有していた。水田は、開墾する男手が不足しているせいか、農業の生産性の低さからか、メマリー世帯の平均所有面積は小さく、積極的に水田を拡大しない傾向がみ

られる。メマーイ世帯の家畜の頭数の少なさも、農業への消極性と関連している。しかし全体に、妻方居住にまつわる慣習から、メマーイは「財産の分与・相続において他の世帯に比して不利な状況にあるとは言えず、分与・相続を通して資産はある程度確保されており、メマーイの生計を支え」(p.102) ているとされる。

第4章「所得と就業構造」では、世帯内労働力の特徴を分析し、メマーイがどのように世帯を再編成し、どのような生業を行っているのかを論じている。一般世帯は約7割が核家族型であるのに対し、メマーイ世帯は4割弱のみが母子世帯である。それ以外のメマーイは親族と同居しており、彼らは共同で農作業や家事労働を行い、食事と一緒にとるため、「1つの世帯と見ることが可能である」(p.112)。親族と1つの世帯をつくることで、メマーイは夫と死別・離別後も生活レベルを維持し、労働力を獲得し、家事に縛られることなく働くことができる。またT村では、夫と死別・離別後に、女性の仕事とされる食品関連の小売りや雑貨店経営を行うメマーイが多く、若い世代では、都市部で観光業に従事する者も増加している。一方、なんらかの事情で親族と同居ができず、かつ幼い子どもがいる母子世帯は貧困に陥りがちだという。

第5章「子どもと老親のケア」では、メマーイが子どもや老親をどのように「ケア」しているのが分析される。T村の子どもたちは、ときに親族の家に移動して何年か(最頻値5年)を過ごす。所得の低い世帯から高い世帯へと移動する傾向があるため、著者は、このような世帯間の移動が、「所得の一時的な再分配と扶養負担の調整の機能」(p.196) を果たしているとする。また、子どもが預けられるのはたいてい10歳になってからで、彼らは預け先で家事労働を手伝う。そのため著者は、子の移動が、「日常の雑用のための労働力の分配、調整機能も有している」(p.196) とする。老親も同様に、キョウダイ間で余裕のある世帯に移動するなど、そのケアが共有されている。また、老親は孫の世話をする労働力となることもある。子どもや老親のケアを共有する相手は、親族といっても親・子・キョウダイという狭い範囲で、夫方より妻方の親族間で行われるという。

第6章「メマーイの暮らし」では、メマーイの「資産」「所得」「ケア」を、個別の事例をとりあげて考察している。まず、著者が滞在していた世帯の事例、次にメマーイが姉妹で暮らしている世帯の事例、最後に73歳、50歳、47歳のメマーイそれぞれのライフヒストリーが紹介される。章の最後に著者は、「彼女たちにはローンや家賃を払う必要のない住む家があり、何とか収入を得られる生業がある。そして、周囲の人々と共に子どもたちを育てることができる。(略)これが裕福ではないながらも、貧困には陥らないメマーイの暮らしである」(p.218) とまとめている。

終章「生を支える社会の仕組み」では、これまでの分析結果が要約される。メマーイが貧困に陥らない理由として、参入しやすい生業、親族との同居で家事労働負担減による就業のしやすさ、女性に不利にならない資産の確保、子どもや老親の移動によるケア負担の共有、近隣の親族との日常的な助け合いがあげられている。これまでの研究で、カンボジア農村社会の互助機能は弱いとされてきたことに対し、著者は、世帯の形態を変え、世帯間を人が移動するなど、「特別な呼び名もなく、ごく普通の暮らしの中で行われる慣習が人々の生活の支えとなっている」(p.226) と論じる。そして、カンボジア農村は柔構造であり、このような柔軟性が、「リスクを分散させ、貧困の顕在化を防いでいる」(p.228) としている。

以上が本書の要約である。本書の内容になにより説得力をもたらししているのは、悉皆調査である。その調査結果を中心に議論が進められ、平易な文章とも相まって手堅い内容となっている。カンボジア農村の人々の生活戦略を詳細なデータから論じた本書は、東南アジア農村研究における大きな貢献といえよう。

本書では表が多く掲載されているが、表によっては多くの要素が入り込み、わかりにくいものもあった。また、膨大なデータを分析するのは簡単ではないだろうが、さらに深く分析する余地もあるように思う。

また、子どものケアに関して気になる点がある。10歳以降の子どもが世帯を移動しているのはわかったが、一般に、子どものケアがもっとも必要

なのはシングルエイジ期である。5章の小括では、「母子世帯の形態を取るメマーイ世帯で、なおかつ子が幼い場合には、子をより良く育て、扶養の負担を減らすための戦略の1つとして、子を他のボーン・ブォーン（親族）の世帯に移動させる事例が多く見られた」（pp.196-197 括弧は筆者）と書かれている。そこで評者は、表4.1「T村のメマーイ世帯の世帯構成」と照らし合わせ、表5.5「一時的な子の世帯間移動」のなかでシングルエイジ期の移動を確認した。評者の見落としでないなら、3事例しかないようであった。シングルエイジ期の子どもは、移動させずに近隣の親族によりケアされるほうが普通であれば、10歳以上の子どもの移動と同様に、そのような幼い子のケアのあり方についても詳しく知りたかった。

また、本書で明らかになった「メマーイが貧困に陥らない仕組み」は、アフリカ研究者としてアフリカ社会と比較すると、大枠でかなり共通点がある。たとえば、離婚後に親族と同居する、子どもや老親を親族間で移動させる、女性が参入しやすい仕事がある、などである。では、多くのアフリカ社会にはなくT村にある仕組みは何かというと、女性が男性と同等かそれ以上に、土地などの資源にアクセスできることだろう。しかし、このような女性にとって有利な慣習は、相続できる資源があつてこそ可能になる。すでにT村では、屋敷地が足らずに水田を屋敷地にすることが行われており、それほど遠くない将来、今のような土地の相続・分与が難しくなるだろう。また、著者も本書の最後に論じているように、村でぎりぎりの生活をしているメマーイや、村での生活をあきらめ都市に出る人など、「貧困に陥らない社会の仕組み」からこぼれ落ちるケースもある。このような人々も含め、今後もT村の「仕組み」を追っていくという著者の継続調査が楽しみである。

本書のコラムでは、「母」や「家族」をめぐる著者の葛藤が、カンボジアの人々とかかわるなかで癒やされたことがつづられている。著者のストーリーテラーの才が、今後の研究でさらに発揮されることを期待したい。

（平野（野元）美佐・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

松林尚志、『消えゆく熱帯雨林の野生動物——絶滅危惧動物の知られざる生態と保全への道』化学同人、2015、204p.

本書は、東南アジア地域の野生動物生態研究の第一人者による著作である。本書で扱われている内容は、大きく分けて3つある。まず第一に、著者が20年近くにわたって調査研究を続けているマレーシア・サバ州（ボルネオ島の北部）における野生動物の置かれた現状について語られる。サバ州では、生息地の破壊（とくにパルプ・プランテーションやアブラヤシ・プランテーションの開発）と密猟が大きな問題となっており、多くの大型野生動物が現在進行形で個体数を減らしているという。著者自身の研究についても詳述されており、とくにライフワークである「塩場」（動物が塩を摂るためにやってくる場所）の研究成果と、絶滅が危惧されているウシの仲間ボルネオバンテン（*Bos javanicus*）の系統学的解析結果が詳しく紹介される。続いて、著者が短期間、出張・調査したインド・タンザニア・ブラジルの野生動物の置かれた現状について述べられる。チンパンジー（*Pan troglodytes*）からアマゾンカワイルカ（*Inia geoffrensis*）まで様々な動物の最新の状況が紹介されており、個体数の減少の背景には共通性と相違性があることが実感できる。世界中の野生動物を広く見てきた著者ならではの内容であるといえよう。そして、最後に、世界中で進行する野生動物の減少・絶滅にどのように対処していくべきかが、これらの経験を踏まえたうえで具体的な事例に触れながら語られる。とくに生息域外保全の現状と課題、可能性について論じられる。最後に生息域外保全の内容を持ってきたのは少しばかり意外だったが、全体としてのバランスを考慮したのかもしれない。

一部教科書的な内容を含めるなど、野生動物の保管理に関わる広範な内容を扱う本書であるが、最大の魅力は、やはり第一のマレーシア・サバ州（以下、サバ）についての記述だろう。現場を知っている人の言葉はやはり、力強く、そして何より説得的である。加えて、著者のサバに対する「愛」が、本書をさらに魅力的なものにしているようにも思う。じつは、私は学生時代（約10年前）に著者